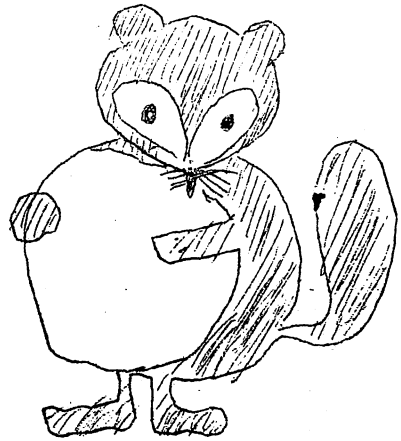


第 70 号

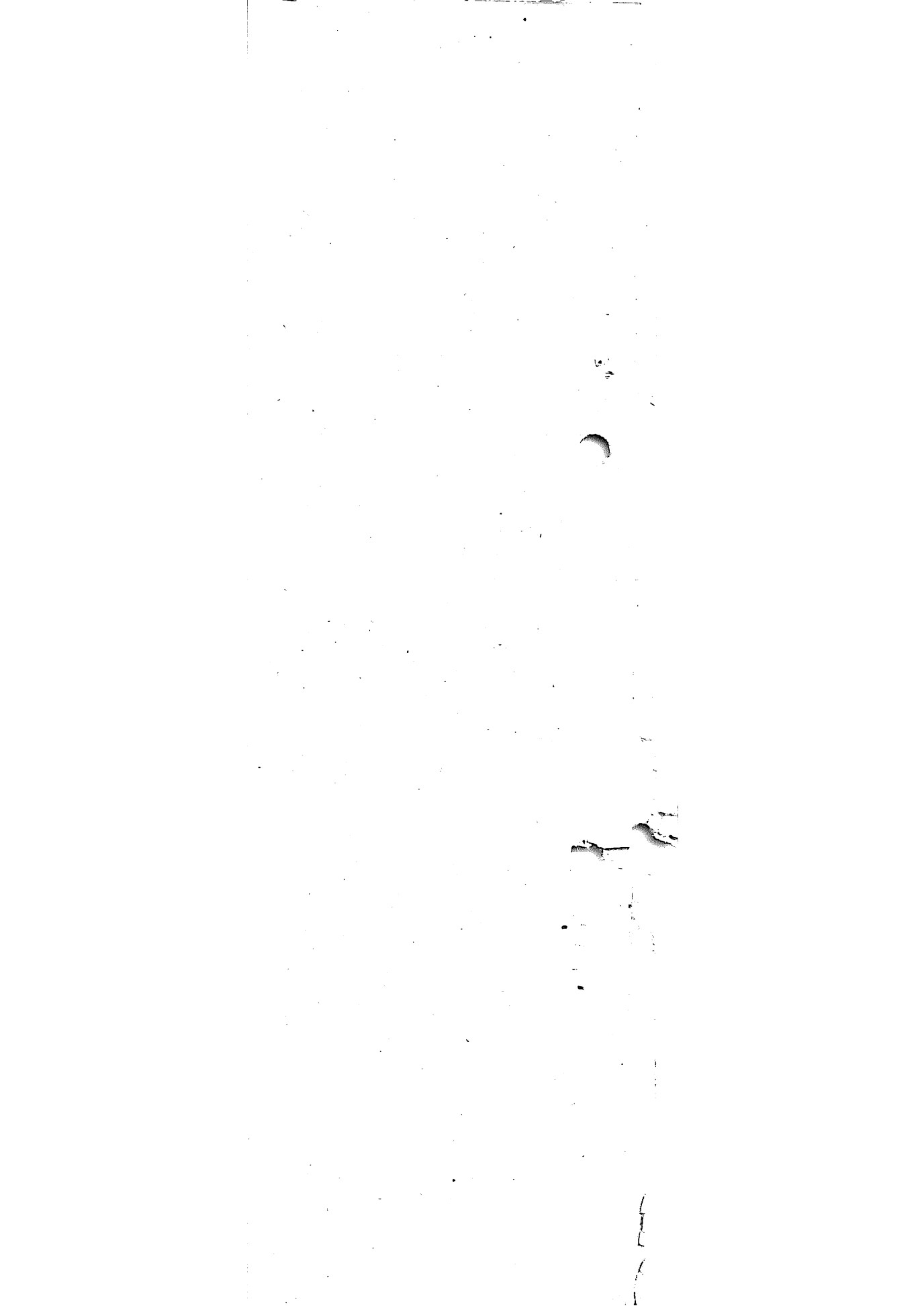
70

# 夏山報告



信州大学山岳会

伊那・松本山岳部



我々部は今年度方針としている3つの旨宿と旧入山行形式ということで部の目的を追求し部の発展、向上を目ざしている。何度も同じことをくり返してばかりいるようだが、その目的としているもの、めざしているものをよく理解し、そして方針をうまく活かしてほしい。しかしながらこの目的としているものは、はっきりこれこれこうだと出されていなくてあいまいなものとしてしか出ていない。結論をいざれば方針の意図しているものをとくに一年生は見抜いてほしいし、上級生にあっては自分達で作ったものであるからしてうまく活かしてほしい。またまずい面があれほとんど指適してほしい。

山登りはそれ自体は行為であって目的ではない。人間は動物と区別されるのは意識を持ちいろいろな行為においてそれを意識し、自由に選択し決定できる能力を持っているからである。我々山岳部も登山行為そのものが目的ではなくてそれによって得られる意識したもの、精神的価値観が目的なのである。そしてその価値観は個々別々なものでありまた自由なものでもあるが、おたがい共通していえることは、そのような価値観をして何らかの形でより良いものを望むより向上しようとする方向をもっているということである。そんなことを山を通じて登山という行為を通じて一緒にやろうというのである。あたりまえだが、工学の山岳部は学生でもって構成している、そしてその構成員である我々は学ぶために選ばれた者でもある。山岳部にあってもまたしかりであり、その学ぶということは先達の築いた一つの文化を吸収し役立てようということである。それは個々にとってもこの組織にとっても同じであり、わかれわかれの意図しているこのような組織の意義は個々の目的なしにはありえないし、組織の発展は個々の向上なしにはありえないのである。

学ぶということは受身ではなくて自主的積極的なものでなければならぬことは誰でも知っていることであるが、ただ注意しなければならぬのはその文化を吸収することによってそれに支配され、個々の持っているあらゆる可能性、独創性をうしなってはならないことである。かといって先達の残したものを襲ってはなにもならない。

今年度の夏山をふり返ってみると、いろいろと物足りない感が残っている。例えば新入指導という面である。新入指導の目的や方針はかなり考えとしてまとまっている

のがなぜ活かされていない。それは上級生一人一人の意識の足りない面があった  
と思える。しかし不思議なことに個人山行においてはうまくできたと言うのである。  
たしかにそのようである。しからばなぜに合宿ではうまくいかなかったのであろう  
か。個人山行による個々の目的の追求ということと合宿による一見全体主義的目  
的の追求ということとは非常に矛盾することのように見える。しかし前に述べたよう  
に部の目的は旧々の目的が基になっているのであり、また旧々の目的が部の目的を  
作っているのである。もっと大きな視野に立ってみてほしい。

### < 付録 >

秋山はすでに下山したPartyもある。来年にはネパールの遠征をそひかえ準備でい  
そがしくさらに上級生不足という大切な時期に個人的な事故によりC.Lの役割をは  
たせなく、部員諸氏に多大でもないかもしれないがともかく迷惑をおかけしたこと  
をお詫びします。その間、佐藤殿にお願いしてかわってもらいましたので御協力御願  
い致します。冬山までには再起したいところですがいまのところわかりません。

冬山合宿は部の後力をフルに発揮する場でもあり各人の健康を期待するしだい  
です。山は常に我々に新鮮な修練の場をあたえてくれます。

# 夏山の経過と成果反省

伊那松本山岳部

## 一、山行計画検討、準備について

1. 7月1日L会に提出ということであったが、一ヶ月も提出されていなかった。

○ 何人山行形式による計画の遅れ  
のんびりほしている水なのでこのL会で予定を組んだ。

4日まで計画提出

5日L会 6日IM総会 10日計画書完成

12日SAC委員会

装飾係、装飾列、装飾をそろえる

記録係 報告書(4月~6月) 計画書(7月~8月)作成について

会計 装飾費 積立金  
遭対 保険 //

部員の動行表

健康診断

他の部との話し合い

(他の部の遭対がどんなことをやっているか)

またとりかわし事項の確認

OB OB通信

ST キーパー表

新人指導 定着合宿の内容

2. 7月1日 伊那部会にて、それ等の仕事を具体化した。

変更 6日遭対委員会 7日IM総会(何人の予定表提出)

○ 遭対面、さらに遭対に関するプリントを作る

- ST, STにおける山行について、話をした。
- 新人指導のこの時の状態は、山行意欲の面では非常によい。仕事のやり方などについていろいろ指導していった。
- 夏山定着の日数日付、及び等を具体的にする。
- Nepal Expeditionの仕事

3, 7月5日 L会にて各計画の検討を party Leaderに呼んで行なう。

- 大宮 partyの目的や、計画の修正
- 鳥越 partyの一年生はつめていくのはやめたほうがよい etc などから話された。

4, 7月7日 IM総会にて

- 鳥越P, 大宮P, 福岡P, 佐藤P, 長野に入る一年生の2P, 浅野の友人との山行, について正式な承認および計画内容について話した。
- 定着合宿の各係目的場所準備等を決めた。
- 部の各係の仕事の予定等山行にむけての準備の予定を決めた。

- STのこし遭対のこし

- OB通信2号

- 報告1. 45年(4~6A)

- 夏山計画書完成

- STキーパー表・キーパー心得

- 遭対プリント

5. 7月12日SAC委員会 流れた

そのおに長野より一年生の面倒が見られないこと

- 新たに笠原P. 川口P. 渡辺の母校の山行という案が出てき、L.会にて決った。笠原P. 川口P. 計画書作る

反省

山行に入っていったこまで肉題として残ることは鳥越パーティーのように計画が煮つまり総会直前にてL.会より計画変更、特にメンバーの変更を強要させたことである。この変更についてはやむをえないにしても、もっと計画を立てている段階でL.会の良いアドバイスが必要だと思われる。これは今後資料等の他の早期検討を一纏にやって行くのが良い

次にこれにも関連するが個人山行形式という事による計画の遅れ又各partyの差ということでもかく充分検討しながら計画を立てて行くということが出来ないということ。ある面では仕方ない事ではある。

次に連社委員会に対する他部の無関心さ、ぶつかり、さらにはふAC委員会の流れて決ったこと非常にふAC意識ということでも他部に疑問を持つるをえない。もしそのような疑問が事実であるならI MACを変えて行かねばならない

二. 各山行

×鳥越P. 北俣本谷 7/30 ~ 8/8

二年生同志でよくやった。スケールの大きいこと、レポートインテイクなど大変してかれたきうだが充実した山行であったようだ。結果的には一年生と

一緒に行かなくて良かったとのことだがもう少し計画をうまく進めるべきであった。会のやり方の不手際であった。天候判断等でもかなり精神的重たさを感じたようだが二年生にとっては学ぶことの多い山行であったと思う

### ×大塚 P. 北ア縦走

目的はかなり達成されたと思うが、二年生 C.L. ということで、もう一つ一年生の山行に対する積極的な意欲というものを引き出せなかった面が感ぜられぬでもない。しかし一年生の体力的自信や認識及び、Party ということと、自分の山行というものの関係を考えさせること等けっこうされたのではなからうかと思ひ。後者の方は今後の部活動のありかたに大きな所がある二年生 C.L. ということもよくやったと思う

### ×福田 P. 中央・南ア縦走

二年生 C.L. よくやった。南アに板東が入らなかったことの判断は良かったと思えるが地下足袋でも足袋が壊れるのでは少し困る、なんとかしてほしい

### ×赤石 P.

計画変更はあったけれどもいたしかたないこと、又変更した際の C.L. 会との連絡もよくとれていた。一年生がよく動いたとのこと理想的 P. 編成であったようだ

### ×KEN P.

目的は達成されたと思える。計画が計画だけに若干一年生の中にしつくり行かない面があった感がないでもない。一年生がよく動いてメンバーシップ等の面ではうまくいった。

C.L. の面がちょっと離れていること等でこまかい仕事など不ゆきとどきの面が見られた



XIIIロP.

一年生二名の山行としては別に問題はない、しかしにあまり好天と慣れ合いムード等で学ぶ所が少なかつたとのこと、これは出来が良い、ただ計画の内容が全部員に通じていなかった、特にルート変更の裏であるが計画内にその旨がはっきり出されていなかった。C、Lとの間では話していたことを、ここにはっきりしておく

### ×残野、渡部の山行

全体的にスムーズに行なわれたようだ、又各partyの特色、各人の特色を生かして行なわれたと思う、一年生にとっても意欲的な山行が行なわれたようだ

### 三 定着合宿

スムーズに行動できたしかし目的のうちの新人指導の面が良く行なわれなかつたようだ、上級生の新人指導に対する考えをしっかりと行ってほしい、そのようなことを含めて、もっと一年生と共に計画を検討し山行中は岩稜を歩き回り雪渓を下ったりした方が良かったと反省している、入山前に一年生を把握し内容をいかに持って行くかよく検討すべきである

部員の合宿に対する意識、強いて言わば部活動に対する意欲のなさを感じさせないでもなり、三つの合宿と個人山行形式ということでは困る、部の方針や目的等のことについて部員積極的批判をこう(自分達のことなんだよ)

### 四、総括

山行面に関して、個人山行形式で自分を追求するということは非常に良く行なわれていると思うが

それが全く自分に直接帰するもののみを追求するようになったら困る。部の一員として部を考へ部を動かしてもらねばならない、全部員にそのことを常に認識してもらいたい。全ての山行が大した支障もなくうまく行なわれたことは、たとえ表面的であってもそれにこしたことはない。今年の夏はまさにそのようなことで、いい条件に恵まれていたと思える、さらにお述べしたことがもっと充実される山行になるようにもって行きたい

## 五、十アルファ

1. SAC全体としてかなり問題があるように感ぜられる
2. S.T.に於ける山行面での利用意識が薄いのではないか
3. 下山報告の遅かったものがあったようにだが、とにかく各party本部には直ぐしてあったようだ。

## 六、山行終了後

9月9日 伊那部会 夏山報告反省 etc.  
9月9日 L.会 " etc.  
9月10日 松本部会 " etc.  
9月12日 IMAC総会

夏山の反省ということがよく話されたと思う、そしていくつかこれから考えて行かねばならないこと等が結論は出なかったが意識されて来たと思う、とにかく冬山合宿にどの位今までの成果を上げられるであろうか楽しみである、それと共に地味な仕事もやってほしい、いくつかの秋山の計画が出された秋かうはもう一度部活動の基礎となるもの個人山行をより一層充実させるために必要な細かく地味な仕事をやって行きたい、そして冬には年間方針にあげられた目的である部の総合力をフルに活動させ、はっきりした充実した山行を行なえるようにしたい (文責 L. 笠原敬一)

○ 昭和45年8月22日~30日

- C.L. 笹原敬一(農4)
- S.L. 市野雄(シ3)
- 花井 三坂(農2) 福田(農2) 市野(農3) 金野(農1) 高橋(農1) 村上(農1)
- 中田(人1) 板東(人1)
- Essen 大塚(理2) 鳥越(農2) 佐藤(人4) 同頼(理1) 川口(農1) 三井(人1)
- 渡部(農1) 臼井(人1)
- 記録 森(農2)
- 気象 小根田(農2) 柴田(理1)
- 医療 森(農2) 菅尾(人1)
- 記録 小根田(農2)

- 8月22日(土) ①
- 5:40 前室登
- 6:50 肩承着
- 7:30 シ登
- 7:50~8:30 黒部ダム
- 9:10~9:30 黒部川原防壁
- 1:55 内蔵助テニ場 T.S.

おによりも今日ほど見る者が多かった。  
距離的には短かったが、道があまりに  
くく険しく、ため時間がかかった。  
(臼井記)

8月23日(日) ① → ② → ③ → ④

- 5:20 T.S. 登
- 6:55 ハシゴ谷乗越
- 8:06 剣先出合 Essen
- 9:10 又砂天出合 B.C.
- 設営後雪上訓練出発
- 10:30 B.C. 登
- 11:50 剣先小屋横 Essen
- 降りながら雪上訓練  
して帰る。

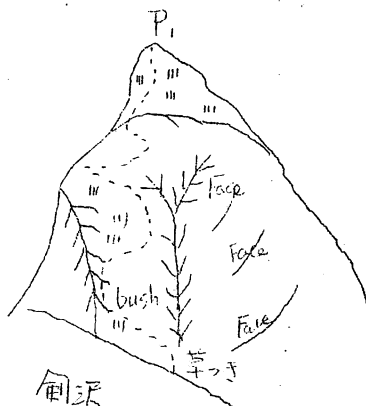
今日も道が険しかった。雪上訓練に行く  
時は天気もよかったのに1時間ほど天  
気は急変した。つくづく嫁心と山の天気  
はと悪かった。(臼井記)

8月24日(月)

- 黒部川原尾根 party
- 5:30 B.C. 登
- 6:10 赤坂尾根取付
- 8:20 P1
- 9:45 P.T. アザール終了
- 10:25 和峰 peak

L. 笹原、福田、森、高橋、川口、村上

P1まで非常に急で苦しかったが、P2か  
ら頂上まではわりと楽だった。



○八ヶ岳上峰 Party L. 青野、高越、藤尾、長次郎、向藤、金野  
 5:30 B.C. 発  
 7:30 5ヶ コル Essen  
 8:30 本峰  
 10:55 池ヶ谷 コル Essen  
 12:00 本峰

○三ノ窓 Party L. 大安、小根田、印井、中田、板東、三井  
 5:40 B.C. 発  
 6:15 二股  
 8:20 三ノ窓子ノネ下雪彦橋草付 Essen  
 9:30 三ノ窓  
 10:05 池ヶ谷 東越  
 10:55 長次郎 コル  
 11:20 本峰

○本峰に23 party 集合後、長次郎谷をへて B.C. に帰幕

3月25日 (火)

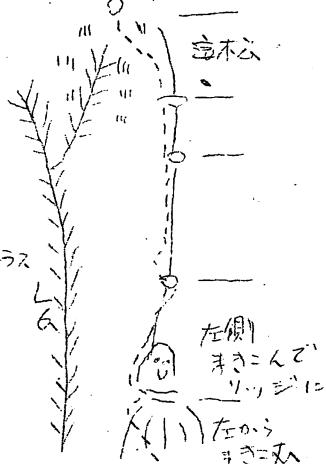
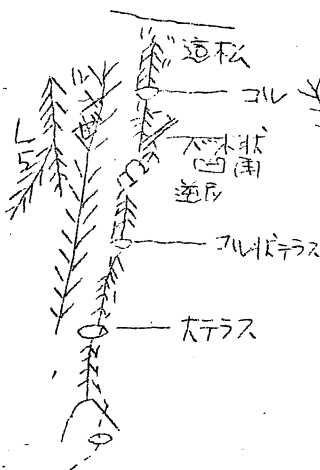
5:35 B.C. 発  
 7:20 熊ノ岩  
 ? この後長次郎左保にて  
 10:00 雪上訓練 (7リセ+fat)  
 Essen  
 後 本峰北壁と源次郎 party に合口れる

○源次郎 party L. 福田、三坂、1年主全員  
 10:30 発  
 11:45 本峰

北壁 L2 下野高越  
 10:30 発  
 10:45 山付  
 1:15 終了

OL4 笠原森

OL5 大安、小根田



本峰に集合後 B.C. に帰幕  
 1:45 本峰 発  
 2:55 熊ノ岩  
 3:50 B.C.

前月26日(木)

○ハッ峰下半 party L. 森、高瀬、川口、渡部

5:30 B.C. 発

6:15 岩小屋 (P1, P2 向ルンゼ"本会)

7:30 P2

8:30 P4

9:05 P5

10:15 5.6 コル

10:30-11:00 c face F

11:10 熊ノ岩

P1, P2 向ルンゼの右岸ぞうに P2 に達し  
P3 は長次郎谷側。P4 は三ノ窓  
側を 5m アップ サイレンして巻いて、  
P5 より長次郎谷側へ 9m アップ サイ  
レンして 5.6 のコルへ下る。  
(渡部記)

○ハッ峰上半 party (6峰まで) L. 小根田、板東、高橋、三井、村上、紫田

5:30 B.C. 発

7:20 5.6 コル

7:45 c face 見物 (~8:20)

8:30 6峰頂

池の谷乗越より熊ノ岩へおろす。

○源次郎尾根 L. 高越、大友、白井、金野、菅尾、中田

5:30 B.C. 発

8:05 1峰下部

9:35 2峰下部

10:30 2峰コル

11:00~1:20 2峰 A, B. Face 高越、大友

12:00 熊ノ岩

○ハッ峰 6峰 C Face 中大ルート

7:20 取付 (笠原、三坂)

9:00 終了

(市野、福田、小根田)

○リッジルート

(市野、福田)

11:40 取付 (三坂、森)

12:30 終了

8月27日(木)

○本峰北壁 party L4

福田、村上

5:30 B.C. 発

6:45 熊ノ岩

7:30 取付点

8:00 取付

9:15 終了

雪石などが多くて上半は面白  
味はなかつたが 2 pitch 目まで  
は快適だった。

○L5 三坂、川口

8:15 取付

9:05 終了

1ヶ所 ショックパイ所はあつたが  
hold, stance が十分あり、快適  
だった。特にリッジ上の登攀は  
実に快適だった。

この後両 party 合流して熊ノ岩まで下る。

○源次郎2峰 A, B Face route L. 小根田、高瀬、三井  
B.C. → 長次郎谷 → 2峰乗越場 → 取付 → 2峰 → 熊ノ岩

○ハッ峰下半 party L. 大友、佐藤、白井、板東、中田、菅尾

- 5:30 B.C. 祭
- 8:05 1峰下部
- 9:35 2峰下部
- 12:00 5峰
- 2:00 熊ノ岩

2峰まじの route finding のまじから時間がたつてこ  
(まじ)。ハッ峰は下半より上半の方が楽しいのではな  
いかと思う。

○ハッ峰6峰各Face

○ A Face 魚津高ルート  
11:55 (三坂、稲田)  
12:50

10:50 (森、高橋)  
12:20

7:40 (笹原、市野)  
8:40

○ C Face 中ルート  
7:20 (森、高橋)  
9:00

○ B Face 京大ルート  
3:30 (左藤、大友)  
4:30

(笹原、市野)

1 Pick 目は早付土まじ  
りて不安定なハッ  
上に出ると面白い。

○ C Face リッジルート  
7:15 (鳥越、金野、渡部)  
10:00

- 2:15 (佐藤、大友)  
3:00

1:30 (笹原、川口)  
2:30

1:40 (小根田、村上)  
2:40

後全員が熊ノ岩よりB、C、ハッ帰幕

8月20日(金)

○お剣尾根 A ルンゼ party L. 笹原、鳥越、村上、菅尾、金野

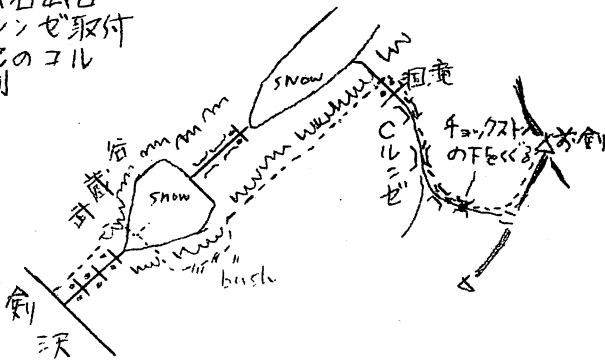
- 5:30 B.C. 祭
- 6:40 A ルンゼ 出合
- 8:00 二股
- 9:00 縦走路



A ルンゼの入口に残雪があり  
かなりしよっぽくはあったが  
右岸を巻きその後なるべくル  
ンゼ通しに進む。ハングや左  
岸よりの岩に降り右岸を巻き  
所もあった。左岸は滑りやす  
立っているが右岸はよかつた  
二股にぶつかり左俵を行き、  
次三俵には、こいたが、まっ  
すぐ行くと縦走路に出、数分  
でお剣 peak であつた。

○お剣尾根 C ルンゼ L. 森、大友、高橋、川口

- 5:30 B.C. 祭
- 6:15 武蔵谷出合
- 8:10 C ルンゼ 取付
- 9:25 ぶくのツル
- 9:40 お剣



武蔵谷出合より右岸で登  
り、雪深をぬたり左岸の  
岩壁通しに高巻きしてC  
ルンゼの取付に達する。  
C ルンゼは木規模な週境  
を登り、チムニー状の煙  
道をこえ、左俵を行き、  
大きなチョックス  
の下をくぐり急傾斜の草  
付を登りコルに出る。  
C ルンゼまでチョックスの  
つたので、C ルンゼ内は  
チムニー状の策で面白い  
たが、いざよかあつた。

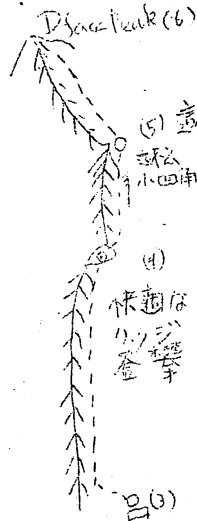
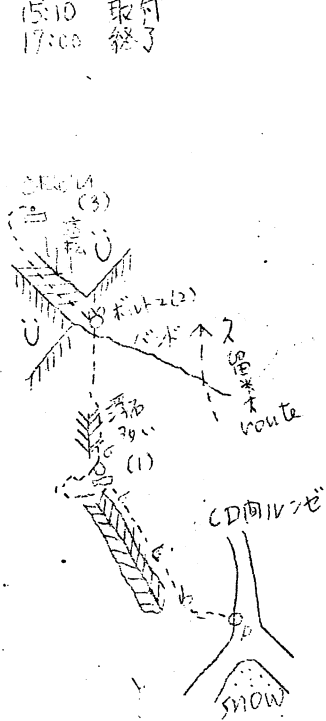
6:00 本峰尾根 L. 市野, 三坂, 狩野, 渡部, 渡部, 三行, 岡崎  
 5:35 B.C.  
 6:15 燕次郎尾根取付 この内 A, B Face route を  
 11:00 P<sub>2</sub> [市野, 渡部], [三坂, 渡部]  
 の 2 party 登攀 (9:55 ~ 11:10)

○ハッ峰6峰各Face  
 A Face 魚津高route 7:40 (小根田, 白井)  
 B Face route 7:30 (福田, 柴田)  
 C Face 中大 route 9:10 (左藤, 中田)

後6峰頭に集谷。ハッ峰上半より剣本峰。

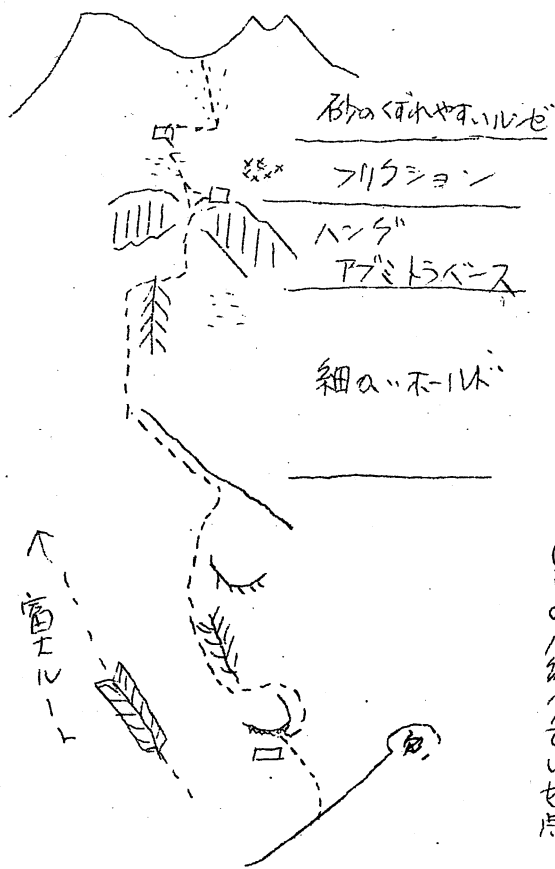
○本峰南壁 A<sub>3</sub> (森, 大安) A<sub>2</sub> (笠原, 鳥越)

○ハッ峰6峰D Face 富大 route 笠原, 三坂  
 15:10 取付  
 17:00 終了



- ~(1) バンド林の所をトラバース気味のおと凹角の右のFaceをよじ、左へ移リリツし回リこんでホテラスにでる。(40m)
- (1)~(2) 浮石の多い凹角から小み跡のついた所を登リ橋の広いバンドに出る。(40m)
- (2)~(3) ハングの間のバンドを右に板け右にまわりこんでホテラス。(25m)
- (3)~(4) 小し左にひいてカンテに出て、カンテの右やいに登るフリクシジョンによる快進な登攀の後一盤位の母定したテラスに出る。
- (4)~(5) ややゴツゴツしたリッジ。ハイ松退じり。事実上登攀終了。
- (5)~(6) 確保の必要のない尾根

隣りに佐藤、市野両氏が登るのを見ながら快進な登攀をできた。一日の行動かほぼ終了した後で、やや疲労しているかもしれないと思ひ意識的に慎重にやったつもりである。充実していた。



2:35 取付

CD面ルンゼを奥まで行き、  
 富士大のトナリのテラスに立  
 つ。暗くじめじめした感じ。  
 真上にハーケンが突いてい  
 る。そうとう広く赤アゲが  
 多い。右にまわり込むと  
 外傾したholdにより30mのぼり。  
 ここでアグミアグミ。ほぼ  
 真上へ5mほど細いhold。  
 そこで富士大ルートに続く中  
 央バンドにある。5.6mトラ  
 ベースすると、faceはホルト  
 びうってある。そこでビレー  
 ー。富士大ルートは3m並横にあ  
 る。そこから10m細いホ  
 ルドによりのぼり、5mほど  
 faceをアグミの穴けなで  
 トラベース。傾斜はそれほど  
 もないが、全くホールドのな  
 いfaceなのでアグミを使う。そこ  
 からハンクをこえる。ハンクらしきも  
 のではなくさほどの苦勞もない。  
 ハンクの上でビレー。これで核心は  
 終る。その上は花崗岩のfaceをフリ  
 クションをきかせたバタバタズル  
 でのぼる。そこからそのまじまじ上へも  
 いけるが、早く岩のからカラのルン  
 ゼ)に入る。あとは1-2ゲイルで終  
 点へ30m。  
 4:40 Cfaceの頭で休む。

OE face 小根田、福田、森

壁の真中付近の大きなテラスまでローゲイルで登り、そこから二本あるリ  
 ッジの右側のリッジをい(左側部分)にE faceの頭までZpickで終了。

8月29日(土)

10:00 撤収開始(体隊)

10:55 B.C. 発

12:35 八丁谷乗越

13:40 内蔵助平テニ場 設営

8:45 槍ヶ岳への縦走party(福田、小根田) 出発

8月30日(日)

3:30 Essen 当番起床

5:30 T.S. 発

7:50 黒田ダム下部

8:55 黒田ダム

9:10 高次

10:10 大田原

11:36 松本

今日の行程は短く、また1日で松本まで着くので  
 足どりも軽く快調でした。



又々山岳部員にして、夏山は最も取扱多い場だと思ふ。上級部員は自分の目ざすものに命をのばすこともできる。新人にとっては、夏山は忘れられぬ山になるのだろう。今年は個人山行ということに、自分からしたいことになり、安全が守られてできると思う。しかし、それをやるには、それなりに他力が必要で、それがない限り年に上級生は考えることがあるはずだ。それをしないで自分の事だけに専念するのはどういうことだろう。「なぜ君は部にいるのだ、君にとって部とは何なのだ？」と聞きたい。

今年の夏山をふりかえってみて、2年生が中心になりそれぞれの山行を行った。実際、上級生が少なかったためにこのような状態になったのだが。本当にこれでよかったのだろうか、こういう形をとるにあたっての対策は考えただろうか。遭対のこと、2年生リーダーによる新人指導のこと……etc.、むづかしい問題が残る。

合宿の場については、今までの慣れ親しんだ奥又から思い切って剣ヶ場所を移した。それによるグレード的な低下は重視せずに、知らない岩場でも安全に登る力を付けることが目的であった。その目的のために剣を選んだわけだが、果たして本当に適当な所であっただろうか。長い雪渓、岩尾根、ガッチリした岩、----- 総合的な訓練の場としてはよいのだろうか、やはり剣は我々には未知であっても、あまりにも知られすぎて、手ごたえのない所であったようだ。又、今年のように上級生の数にくらべてあまりにも新人が多すぎる状態で、あのような1つにまとまってやるのがよいのだろうか。年3回の合宿で各個人を知るためにも、また相互を知るためにもまとまってやるのがよいかもしれないが、集団ということ意識して新人が他人まかせになつたりするのは、たとえ合宿であろうとも岩のぼりをする者の持つてはいけない意識だと思ふ。その他人まかせ意識を認め、一介ではより安全にのぼれというのは変な話だと思ふ。

部であるかぎり新人が毎年入ってきて、新人指導が部の大切な要素である。それのみでは個人、部の発展はあり得ない。現在、上級生は新人の指導にのみ時間をとられて自分の目ざすことができないとしたら上級生はたえることしか知らない人間だろう。まったくさみしいことだ。けっしてそうではないと思う。2年生はそろそろそんな事

を考えてみたらどうだろう。それがそのまま理想的な部運営に結びつくと思う。

## 佐藤 正敏

剣定着反省。期待していった剣の岩と雪であったが、いろんな面で失望させられた山行であった。第一に岩がゲレンデ的な感じを呈し、本来の登山といったもの 自分でとらえているものとの相違があった。

人的構成からみて、上級生が少ないことが言われており、全日数入山出来なかったことに関しては責任を感じている。だからといってどうしようもないのも現実だ。しかしながら下級生中心でやって一応の成果があったとみるのは、今後の部の発展に多くの期待と同時に不安が感じられる。2年以下というのは華やかな登降の陰の地味な基礎を知らないでいる場合が多く感じられたし、一年生がやる時折の勝手な行動にも、おとなしすぎる二年生の勢力が足りなかったのではないかと感じられた。積雪期の山に行く場合に、ミステイクのないようお互いにいましてのるべし。

何にしても小生は剣の東面への夢が一層かき立てられたし、積雪期への期待も高まった。あれこれ考え登って、写真をとって、いつの日にか思いをはせるのは、いいことだ。あつた。新たな情熱をかきたてられた事は、小生自身、大いに、有益であったと思う。

今、すごく疑問を感じている。それは山岳部の方針や、やり方でなく、自分自身に感じている。それはこの夏山で感じたことである。

はじめ白樺へ五人と行った。その山行とは言えないかも知れない(同じ山岳部の言葉で)でも別に予定された時間には一日の山行をするのだから山行だけとは感じないし、又ゆっくりとした山行も楽しいことだと思った。それから後直をやった。これは地下夕世を歩いてやったので時間もコースタイムより速く奥に軽快だった。サマエはすごく不愉快(言葉がみつからないのでいささかきついが)に感じた。こんなことも先輩は感じてきたのだとは思いますが日のたつのが遅くいらしたこともあった。これも体をこわした為でもあると思いながら教団をすごした。剣台宿も体の調子が悪いのと、サマエで山岳部にいるのがいやになった事が参加しようという気持ちに結びついていると思う。9月に入りその疑問がさらに大きくなるのではないかと思う。夏山山行にこの気持ちも一幕がある。

山口 武

今回の夏山縦走は中央リフス、南リフスへ行ったが、非常に楽しかった。元来、大人数で行動するのが嫌いな小生であるから中央3人南4人という少人数パーティーでの行動はやはりいいんだと思った。個人山行形式にすると個人の勝手な行動が多すぎるという批判があるだろうが、しかしそのために山を楽しむこともないことになってしまったのでは少なくとも小生にとって山岳部に入っている意味がなくなる。公のために個人の自由というものがまっ殺されるのはいかにパーティーグッズから文筆まで山岳部でもゆるされることではないと思う。上級生諸氏ももちろんそんなことは否定すると思うが集団と個人とはあくまで共存していくべきであってどちらかにバランスがたむくということはいけないうと思う。このことはあとの台宿の頂でもうすこしいうとしてこの頂の主題である夏山縦走に関してますボーに縦走なんて奥にあほらしいと思った。体力養成という文言名分があるにしても、ないしう苦勞して登った山の頂上へ行かなかったりたとえ行ったとしても15~20分を降りてくるなんてまったくアホらしい。

山登りの究極は頂上に登ることにあると考える小生にとって頂上を獲目で済むから次の山をめざすなんてことは非常に不遇である。頂上を全部踏かぬとぐちゃぐちゃ一番高いところを踏まない縦走なんてあまりやる気がしなくなった。その意味で来年の夏は東北の山々を久しくしていない旅行かたがた一ツブ征服してみよつと思つ。その他には山の勉強という点ではいろいろな状況に恵まれ非常に勉強になった。係としての反省はエッセン係としてやや怠慢な面があったと思う。綿密な計画を立てなかったという点において、又個人的な反省としてはやはり上級生に頼りすぎたことだろう。勉強不足とともに自主性に欠けていたと思う。

今回は合宿としては二回目であったが前回の新人合宿と比して、荷の重さにもかかわらずはるかに楽であったということはやはり体力がついたということだろうか。とにかくよほど体調が悪くない限りバテることはないという自信がついた。手足のひまの戻り具合が以前はますます悪くなり辛い分苦しい思いをした。

タリセードの際、慎重さを欠き転倒し迷惑をかけたことは申しわけなく思っています。斜面に対する異常なまでの恐怖心に一時はどうなるかと思ったがその後はその恐怖心を払いのけることだけに全精力を集中し最終日にはなんと久元にもどった。タリセードの時など「ヤカヤロウ」「ワザケルソシヤネエ」などというバ声が浴びせられるがその場合上級も他に言葉がないのはわかるが我々だって決して好きこのんで転倒したり石をおとすのではないことを忘れないでほしい。上級生の「二年前の姿だからそれくらいのことではわかると思うが。さあ、パーティーシツプのことであるが更にこまごまとしたことにそれほどまでに注意されなければならぬのだろうか。冬に大層なことだからと色々な理由があるだろうがこれがたして本当に必要なかと思わせるものも時々ある。たとえば馬車の行動、これほど手遅に隊列を組む必要があるだろうか。集団と個人の間柄という問題は非常にむづかしいが、またすぐりの必要な問題でもあると思う。

## 夏休みを通じて

夏休みの殆んど全てを山で過してしまった。その後に残ったものは、これでいいのかしら? という疑問だった。入学して以来、俺の生活は、山岳部一辺倒になってしまっている。この生活に何か疑問を感じる。

## 山行について

北ア縦走、赤石沢溯行、定着合宿以上、三つの山行に於いて、荷物が割合軽量だったことに、体力的不安を感じる。特に前者二つの山行は、20kg前後だったので、体力的自信をつけることができなかった。反面、北ア縦走に於ては、一週間という割合長期間の山行を20kg前後に軽量化できたことは、意義あると思う。縦走、沢登り、岩登りと三つの山行、全てが、趣きの異った山行であったので、多分面にあたる山行が、できたのは、よかったと思っている。

多くの上級生と山行を共にできなかったのが、残念であった。入部以来、伯人山行に於ては、三坂氏、鳥越氏、佐藤氏の三人のみであり、他の上級生とは、山行を共にしていない。これからはもっと多くの上級生と山行を共にしたい。

山行を通じて、一日も雨の時はなく、天気にはたいへん恵まれていたようだ。これは、下界における態度によると思っております。

## 金野美登志

縦走は、初めてのアルプス縦走という楽しみがあったが、思った程、楽しくなかったというのが、本音。他のメンバーが楽しかったというのに、僕が、そんな気持で終ってしまったのは、意欲の相違からかもしれない。しかし、アルプスの素晴らしさを

さ程、感ぜられなかったのが、僕にとっては、確かである。又、思つた程、自分の体力が、確かでなかったのは、残念であった。やはり、あれ程の長い縦走になるとまだまだ力不足であった。が、これで一週間や10日間の山行には、かなり自信ができた。1つ付け加えれば、山行するならばやはり、リーダーで行きたいと思つた。結局、普通のメンバーでもそれなりの意識をもてば、リーダーもメンバーも同じだと言われたが、やはり僕にとっては、リーダーである時と、唯のメンバーである時の意識が、違うと思われた。合宿は、岩登りが主という事で、かなり緊張していたが、思った程、登れなく、残念であった。かなり、合宿には、慣れてきたが、もっともっと一生懸命色々な事を先になつてやるべきだったと。まだ、自分に甘い所が残っていたことは、残念だった。熊の岩の所に集まって、先輩が登攀している間、雪上訓練でも、どんどんやるべきであった。あの時は、疲れていたせいもあって、意欲がなかったけど、やはり、合宿なんだから、もっともっと積極的に、やってみればよかったと反省している。今年の夏山は、初めてのアルプスでの長い山行が、勿く、苦労したし、時には、先輩まかせな点もあったが、一応これで、アルプスの概要もつかめ、クラブの夏山山行に対する考え方もしつかりわかったので、来年の夏山、これから、秋、冬の山行に生かして行きたいと思う。

## 柴田憲一

1. 川口<sup>君</sup>との北アルプス縦走について

コースは、扇沢—針ノ木峠—平—(読売新道)—水晶岳—雲ノ平—太郎—(藁師往復)—黒部五郎—双六—笠—槍見温泉 でしたが、針ノ木谷の下りに時間をとられ、やる気もなくしたので、コースを平—五色—藁師と変更しました。

1 週間連続して晴天。天気にはとても恵まれていました。  
1年ふたりだったのは、気ままな山行だったが、少々ダレた  
ようだ。でも少人数の山行は、楽しいと思いました。

## 2. サマーテントについて

8/2 ~ 8/5 キーパーとして入山しました。毎日楽しく生活出来  
ました。4日に大谷さんに「ずい分暇そうにしているが、自分から仕事をみ  
つけろ！」とのお説教を受けました。チーフキーパーが1日の仕事予定表を  
作ってくれたら良いと思います。

## 3. 家族と乗鞍岳に行ったことについて

バス登山は気が引けました。観光客の列をかきわけ整備きれすぎた道を山  
頂まで行きました。山頂より弟と二人で直下の池の回りを歩きました。観光  
客の世界とは、カリ離れた別天地。本当の山道。観光客がウジウジいる  
山頂を尻目にお花畑。ザクザクの道を歩きました。乗鞍岳も観光道とはずせ  
ばそこには素晴らしい世界があるのだと思いました。

## 4 夏山合宿について

反省点として①岩トシを十分にすべきであった。

②自分で自分をしごく態度がまだ不十分。

③落石を出してしまった点などまだ基本的な歩き方も出来  
ていない

## 菅尾 憲二

荷が新人合宿程度だったし、一日の行重時間(B.C.までのアプ  
ローチ)が少なかったので快調でした。一番残念というか疑問に  
思った事は、岩登りや岩段歩きなどの行重を終えて、いちいち熊の  
岩に集合して、無駄な時間を過ごした事です。剣のPeakで集合  
したのは、我々一年が雪渓技術が未熟で、安全に下れないという  
事で納得できるのですが、熊の岩からなら安全であるから早く一日のノルマを  
終えた場合などテントに帰って休養をとれば蓄積疲労の度合いもかなり違ったと

思う。津次郎尾根三峰の下部と二年生がABフェイズを登る間、じっと待  
つた場合も実に退屈な縦走路である故、のんびりと横になる事もできな  
かった。これなどは両面の労費以外のなにものでもないのではないかと  
思う。パーティーの組み立てにして行動(一日一本)が終われば次のルート  
を指定しておいて、どんどん登れば一年生だってたった一本ではなく二  
三本は皆登れたのではないかと思うと残念です。新人合宿比で夜酒が  
あったり又テントに帰ってから上級生と話しをして夕べったりした  
のは実に有益であった。C.L.とも親しくなれた事は楽しい思い出  
となっている。これは少数であった事も影響している様に思う。  
個人的なことは省略して雑談としての事は皆で総会で夕べりたいと思  
います。

### 高橋雄介

今年の夏休みは予想通り山で始まり山で終わった。今考えてみると苦しさ  
はほぼ忘れかけておき楽しさが強く残っている感じである。サマー  
テントで穂高、縦走の後立山、合宿の駒岳と実によく登った感じがする。  
サマーテントの反省からすると初めの予想より暇があったにもかかわらずあまり  
自分の登り方ができなかったこと。これはテントのハイキンス的な人  
囲気、自分の努力が足らなかつたことによると思う。また上高地に長く  
いたせいで自分を見失っていたのではないかという疑問がある。後立  
山の縦走は非常に楽しかった。自分を励ます程度歩き、冗談まじりに  
言い、しかし、しめるところめしめると楽しかった。これはリーダー  
によるものが大きいと思っていて感謝しています。駒岳については  
気力に欠けていたことを反省します。この前、この集団によるため  
他人まかせの傾向が強かったことに原因あると思います。もっと強  
しければならぬこと、自分の体をよく管理して健康に気を  
つけることなど駒岳について反省します。



## 中 田 茂

8月中旬に13日間の縦走と9日間の定着合宿をいたしました。まず感じましたことは良い天気、好天続きであった為に縦走も順調に予定を終了することが出来たということです。但し、台風の為に予定の一部、笠ヶ岳往復を断念したことにはしかたのなれごとだと思っております。合宿の場合も同様であったと思えます。次に僕自身の体力の問題であります。縦走に参加した者の目的は体力の養成に他ならなかつたわけなのでありましたが合宿入山の日にはバテてしまい、その目的が達成できていかなかったことが残念でしかたありません。次に技術面ではありますが、まだまだ雪上技術があがらなかつたかと思つた。その他にもザイルワーク、岩登り、歩ませ、色々の面で技術面の不満がまだ残っております。具体的にどこどこが悪いと思つたということは僕自身にはまだわかりませんが、それ以前の向かがまだわけていりないのでないかと思つれます。何かはわかりません。最後にメンバーシップの問題があり、これが一番大事なものであります。一番なおざりにしておいた問題でもあります。山行中にメンバーシップと連動の行動をとつた時など病切に感じられました。「これではいけない」とこの重要な点を今後秋からの勉強にかけたかと思つております。夏山を終つて、気分が楽になり、これからが休みになつた気分です。

## 板 東 昭

入山時にバテたことは新人合宿同様体力不足を痛感させられた。歩行中落石に注意したもののまた十分でなかつた。グリセード、特にストップの階段でなれ。新人合宿同様まだまだ自分から進んでやる状態ではなかつた。

## 間 瀬 健 治

山に入る時は先を行きの不安と胸ときめく何かと（これは果外、がっつり私には期待する程の事もなれのだが）あります。それが、どうして山とお別れする2-3日前になると「あと何日ぞいべ！」なつて強く、街恋しくなるの

でしょうか。街に待つ人がいるだけでもないのだから、そんなに街が恋しくなるといふことはないわけで、これは、「あと何日ぞいへ!」の原因ではないだろう。するとなにが原因なのか。私の場合は、まって、どこにいてもあつてしまつていふことがあるから、この場合も、山ばかり特別に考えたりしてことば必要ないと考えた方がいゝ。だがわたしが山登りをするのはなぜだろうか。私はある種のロマンチズムに酔つて山登りのせいを好むのではないか。こつうロマンチズムは、林房夫のそれに比べてよく考えてみるとたゞはん危険なぶんにはなないだろうか。つまり、ロマンチズムに酔ふことは、ちやうど戦争当時の軍隊内の生活の中にせいかあつたといふことで危険だとおもうのであり、この点から、即反動化、軍国家と想像する事は考えすぎなのだろうか。小田集の18才の処女作「明後日の午記」に登山家の兄が、B型命令状が来る寸前に稜高で死んでいる事が書かれている。登山家のロマンチズムに、小田集が何か畏れをもつていふとけとれるのだが、私に甘んじは同意しかねる。私には、敢筆的としかうせとれないのだが、誰しかへんに移るのだが、どうして山登りがあつても畢竟なのか。頭がおかくなるような体たつたとき、せいにままして時間のあがる速さを、また、浦島太郎のせいを感じるのだろうか。こんな私の山登りを今後持続させるためには、いふた何をも必要とするのか。何をとり入れるかはいいのか。また、この無気がいつまでも続くかは、この夏と関係があるのか。この夏休みと。登山家は浦島太郎なのではないか。

### 三井和夫

はじめに、長野山岳部計画の夏山縦走に参加できなかったのは、残念であり、存んとか他に任方がなかつたものか。結局、先輩の数が少なすぎて無理だったけれど。山行全体の反省として、例えば、Seilワークの未熟さにおける様な基礎技術習得がなつておらんのだ。この事は毎回書き、又、反省に掲げておるのだけれども、平生にやっておくべき事だ。この基礎技術には雪上でも言える。新人合宿の後の反省で、雪上技術に不安があると思つてたが、今回露骨に現われた。下降時のキックステップの件である。みんな上手ではなかつた。小生も勿論。けれど今合宿でもどうどうキックステップはマスター出来なかつた。下降時はグリセードをやっちゃうから。

次に、体力がついてない事である。雪山縦走もじっくりやらなかったし、重い荷物  
がつかう事もなかった。夏休みの山行の練習量では一番高かった。雪山前までには充分  
当に体力的な限界を延ばしたい。

全体を遅くして、一つ一つの山行では満足感もあろうが、何かもの足りなさが残る。  
空虚感も残る。全然夏休み中の成果がない様にも感じられる。強いて成果をあげ  
ると出てこない事もないけれど、すらすらと出て来るものではなく、ぎこちない、や  
っと頭からしぼり出したものという感じだ。

## 村に絶一

今回の合宿は自分では新人合宿での雪上訓練の不足を補うことに主眼をおいて参加  
したため、充分とはいえないまでもみんなの何とかおいつくことができたように思い  
ます。体の調子も比較的よく、良い条件に恵まれたと思います。岩もそれほど期待し  
ていなかったのが登ることかできて、剣の面白さを少しでも知れてよかったと思いま  
す。他の地域は無知に等しいのですが、剣に行っ て自分にとっては今回の合宿は成果  
があったと思います。

### 装備について

- ・ハーケンが剣の岩のリスによく合わず、それほど長いものはいらな<sup>(C 100)</sup>いと思った。
- ・ザイルの不足と消え方が目立った。

### その他

- ・岩トレの回数が少ない。ただ岩を登るのみではだめだと思う。たとえば「確保など」  
の安全についてゲレンデで徹底して練習すべきではないでしょうか。

### 岩トレに関して

- ・ビレイの位置(ピッチの区切り)を同じルートでも場所をかえてやる。
- ・ザックを背負って登る。その他考慮してもよいのではないのでしょうか。

### Essenについて

やはり縦走と同じように、野菜や肉の不足が目立った。

個人山行

今夏の個人山行は高越氏Partyの黒部北又谷に参加不許可になり、その代わりとして出かけた母校山岳部の南アルプス北部と、福田氏Partyの南アルプス西部の二山行であった。どちらも南アの、それも北部のおさと南部のおさを経験出来た良かったのであるが、「楽しかった、苦しかったetc.だけに終わらしてはならぬ」という通り、反省すべき点とここに書き置き、これからの新たなる山行の指導標としよう。

高校山岳部の現役連中と出かけた、北沢峠、仙丈、甲斐駒倉復、北沢から野呂川遊歩行として白峯三山縦走、毎日好天に恵まれて快調なペースの山行ではあったが、OBとして参加し、後輩達の未熟な点、オゾイ技術、チョンボな数々が目につき、私=現在大学山岳部の現役のしかも、いろんな事を学びかつ実践していかねばならぬ新人として大いに考えさせられた。私が彼等を見え気がついた事は全信大山岳部の場合、彼等後輩の姿が私=新人にあたるのではないが、信大山岳部の上級生先輩達に、私新人がどのように実に頼りなく見えるはずだと思つと、これからの山行に、大いに学び、反省していかねばならぬと思った。

南アルプス西部縦走、福田Partyの山行はこの前6月に行った白山行と同じく、少人数のおさを充分味わえ、福田氏三坂氏からいろんな山の事を学ぶ事が出来た山行だと思ふ。ただ、今回の山行トレーニング不足で非常にシゴかれた事と思つと、短期間の山行と高を越えていた自分が反省させられる。と同時に、夏山は新人としては一番必須なのは、自分の体力への自信ではないかと思ふ。それがこれからの山行に大いなる影響を与えるのではないかと、つくづく考えさせられた。7月頃、行きもできぬ身のくせに、北又谷の山行に参加希望した自分がはずかしくてならない。この南アの短期間の縦走でも、剣岳定着合宿にバテなかった事——ある種の自信、特に体力的なもの——にたがっていると確信している故に、一番、前回の夏山の意義というものを感ずる。話はかわるが、Essen費が1日1人150円でしかも非常にたくさんあってうまかったのは夏山の怪だ。信大山岳部で、Essenをあまり山に残してきたなどというのは未だかつて無かった事だろう。

## 岩登り定着台宿

Essenのこと、装備のこと、場所のことなどは総会の折にみんなで話し会って反省すればよいと思うのでここでは反省文ゆえに内的事柄のみを記そうと思う。まずオーに、台宿の前に南アルプスに福田氏等と入山していて体が山に慣れた事もある。ケリはしたが、全く体が決調で岩も登攀出来たし、入下山ともバテなかっただけに、今台宿は満足いくものと下山してきた。又、入部してはや4月、SACにも慣れて、新人目宿の時とは数倍も楽と感じていたのだが、そこに甘さがあったのだろうか。SAの発言(下山後の部室での反省会)の通り自分勝手に行動が、自分で知らず知らずに行っていたのではないか? 個人山行の良さが全く生かされていない。Partyを組むとはどういう事かという事を、とにかくC faceを攀じたい、チンネを見たいというような事事で腰を一杯にさせていて、考えて行動しなかったのは実にくだらぬ奴だと自分を軽べつしたくなった。Partyを組んで行動する——この事がすべてこれからの雪や水の山での行動に影響を持つだけに深く反省したい。

Base Campを真砂沢に置く正統性について、下山後の反省会で同期のN君が長野の台宿が熊の岩にB,Cを置いていてうらやましかったと述べていたが、私は真砂沢で良かったと思う。今回のC,Lの判断に素晴らしさを感じる。いくら岩登りの台宿とはいえ工学山岳部の旗印とするオールラウンドな山とはあくまで頂上をめぐす過程の中で岩もあれば沢もありかつまた冬の氷壁もスキーもあるものと信じている。それゆえに熊の岩をはまったくの岩遊びに落ちいるキケン性がしらすしらすに出てくるのではないか。さいわい私達は真砂沢をB,Cにしてアプローチを経て、六峰のFaceを攀じ、剣の本峰に立ち、雪溪をフウフウいいながらB,Cまでアプローチを考えつつ下山する過程を何日かくり返した。アプローチの持つ語感のすばらしさは今回の夏山個人山行(南アルプスの福田Party)で聖岳に憧れつつ長い遠山川の軌道を汗みどろで歩いた事を考えると、私にはこれからの全ての山行に必要と考えたい。たしかに熊の岩は便利だがあまり便利ばかり追求すると(合理性を追うと)山に登るという行為自体、社会通念から見れば不合理の権化のようなものだし、何か何だかわからなくなるゆえに、朝、北アルプスの秘境と一時云われた内蔵助平にいた自分がその日の昼には松本の部室にいたということが不思議でならなかった。

## 大 安 徹 雄

全体的に今年の夏は、自分にとって満足できるものだった。2週間の縦走、10日間の岩登り、その他、サマテンのキーパーと内容は、別にしても日数的には、休みの大半を費したとは言え、それだけの価値は、あったと思います。

縦走の方から言いますと、チョンボなリーダーでしたが、天候に恵まれたこと、市野氏や小根田にいろいろ助けをもらい、又、1年の皆さんもよく、がんばってくれたおかげで、何とか無事に終えることが、できたように思います。しかし、何か、唯、全コースをトレースし終えただけで、内容的に薄かったような気がして、なりません。今山行では、技術とかそういうもの以外に、1年生の指導面、リーダーのあり方の難しさをしみじみと知り、いろいろ教えられました。意義のある山行だったと思います。

剣合宿の方では、小生の岩技術の未熟さを考えさせられた次第です。従来 of 合宿とは、異り、何か厳しきというものが欠けていた気がします。これが、何人山行形式より生じた慣れあいなら、反省させられるものと思います。全体を通して、やはり、上級生部員の不足をかなり感じさせられました。縦走でも、上級生が、長期の山行をできなかつたこと、剣において、1、2年生の人数に対して、上級生が少なかつたことなど、かなり深刻な問題だと思ひます。

## 小 根 田 一 郎

今夏は、山岳部というクラブ(特にSAC)においての2年生としては、矢格でした。(心構え、配慮、態度、仕事[役割]において)精神的には、1年生と同じでした。“本当のギム”にだけおいて、2年生らしきことをやったのみでした。定着後上高地までの縦走においてのみ、この夏に思ひ出にのこるような山行が、

でまたのみでした。他の縦走、定着では、仕方なしに  
入ったという感じでした。今夏は山だけで何もできない  
と夏の初め、あきらめて、やるじという気では、あったが、結局  
やる気のなさにつながり終った。何の収穫もなかった夏休み  
であった。(むなし〜い! 哀しいそう〜!)

## 鳥越 洋一

いへ夏山を終え、今いざ反省をしようと思うと仲々、  
まとまらない。ただ、心に残るものは、無事に事故がなかった  
ことである。去年の日高の苦しい思い出は、もう、一生、忘れられな  
いものだ。それほど、強く心に残る思い出がないということは、  
各山行をうまくやったことかもしれない。この夏、俺は自分の  
力を全て出した感じだ。この夏山について考えたことは、日記を  
見ると俺の考えの動きというものが、分る。以下、それを記す。

7/5 リーダー会。

俺は、リーダー会を信頼できなくなった。部員が、どんな山行をするか  
つかまず、もう計画書を刷ればよいという時、1年生を連れて行く  
ことは、ヤメロという。夢がくずれた。ホントにひどい。もう夏山の  
計画を立てるといふ気力は、ない。部活動を伯人形式にしたなら、  
リーダー会がもっと、各部員の行動をよくつかんで、よい計画が作られ  
ているかどうか、気をつけろのが、真のリーダー会では、なからうか。  
俺は、1年生を連れて、どの程度の山行が、できるのかということが  
よく分らない。だから、それを正しい方向に導くのが、リーダー会  
たるものではないか。もし、本当に、伯人山行形式を活発にしようと  
する気持が、あんなら。

7/10 1日、計画書と報告書作りで、終ってしまった。しかし、1日をむだに  
したという気持は、ない。1年とも、いろいろ話をしたし、自分にとって、また

他人から吸収した1日であった。今、忙しく部の仕事に追われている俺にとって、1日をどのように暮らして、充実した1日になるということが、大きい。夏山に備えて、トレーニングをやらねば、この夏は、指導の立場の山行だから、それなりに、考えて、行動しなければならぬ。

7/15 今、オレが、山岳部員として、パーティシップをよく知り、その中で、山行を通じて、自然見になれることは、実に素晴らしいことだ。山行のゆずりあい助け合いというものの、素晴らしいは、去年1年の山行を通じて、骨のズイまで、知らされた。このことを大切にしていきたいと思う。

8/14 赤石の計画を終えて、無事伊那へ下山する。北又を終って、1日の間をおいて、すぐの入山なので、身体に自信は、なかったが、入山してみると快調であった。この山行は、自分の力を十分に出した山行であった。リーダーの山に対する考えと自分の考えが同じ様なものため、自分の好きなような山行が、できた。南の赤石沢は、もう今は、いい思い出となった。北又、赤石と原始的な沢に入って、2つとも自分の全力を出すことが、できたことは、実にうれしい。

8/17 もう夏も終わろうとしている。この夏求めたことは、何だろう。部活動で、今年は、何を求めることが、できただろう。今までにも、多くのことが、求められた。北又、赤石、この2つの山行は、2年部員のオレを厳しくシゴいてくれた。

8/31 今年の夏もお別れである。オレの場合、山、山……で、終わってしまった感じである。しかし、今、それをかえりみて、少しも不満をおぼえない。充実した夏であったと考える。そしてまた、このような夏があってもいいと思う。青春をぶつけた夏が。(鳥越氏秘蔵「夜なべ」より)以上、反省には、なっていないと思う。しかし、夏山の前後にこのようなことを考えたということだけだ。



### 三坂健次

そのI「北又谷 遡行と北条稜線の縦走」

まず、計画がほぼ出来上がった頃突然、計画の変更を迫られたのは当時全く心外で、上級生不信にさえ陥った。ここで冷静さを欠いた事は、計画変更にあたってはまだ続いた様だ。勿論一年生も行けると思っていた(半分は上級生の言葉を丸飲みにしていただけもある)。自分達に非はあるとしても、その後大空からの様な発言(ニュアンスが多少異なるとしても)が出て来た事も相俟って、後味の悪さは残った。

北又谷 遡行が主目的だったが、それのみをねらうなら入山を短くした方がよいただろう。実際、縦走の分の荷を含めると遡行そのものがかなり苦しくなる。反面交通機関の発達した現在、アプローチや抜けてからが長いというのは、別な意味で大きな喜びともなるが。 遡行 オフ1日目にして大きな失敗から行詰まってしまった。谷に翻ての遡行は、まこと楽しいものとなったが、その後稜線に出るまでの藪こぎは、また苦勞が多かった。それだけに「登山道」に出た喜びは並たいていではなかった。もっとも、その後に再び始まる藪こぎ(日本海への)を避け ESCAPE したことは、あとで「思えば」やや安易に走りすぎた感がある。そもそもこういったことを感じるというのは、計画立案の段階からすでに問題があったということなのだろう。夢は大きいほどすばらしいには違いないが、この山行に一年生を伴わなかったことは結果的にはよかつ

たと言える。二年生は、二年生でしかない。こんなにじ  
かれた事は、そうやたらとないが、この大きな苦しみは又、  
大きな教訓ともなったものと思う。

## そのⅡ 「南アルプス南部縦走」

昨年の縦走でやり残した部分という意味でも、やはり、南  
アルプスは自分にとって、未知のものとして、気にかかっていた。はじめ  
予定していた一年生が一人入山出来なかったのは残念である。  
一年生に関してはよくやったとは言え、注文もある。特に生活面(食  
SSENなど)では、もう少しテキパキやれる様心掛けてほしい。また、入山  
に際しての心構えという点ではもっと考えていいのではないだろうか。  
短期の縦走という事で、あるいは<sup>登山</sup>入山行ということでは入山前のさまざま  
な準備(精神的・肉体的)に手抜きがあってはならない。もっともこ  
のことは、自分自身についても詰問されるべき事であろう。この山行  
に参加するにあたって、前の北又谷やこのあとの剣合宿に注ぐ  
ほどの熱意が、一体自分にはあったらうか。なかったとしたらそれは  
何によるものだろうか。このことは今もなおわからないままである。

## そのⅢ 「剣岳定着合宿」

全体としては楽しかったといえる。体の不調というマイナスを補  
ってなお余りあるほど。入山前からの不調の原因は結局わからな  
いがそういう状態で入山すれば、みんなに迷惑がかかることく

らいわかっていそうなものだ。それでもあえて、一したのには、  
半分は、なぜかわからない義務感のようなものと無意味な虚勢の  
ようなしり、あと半分は、全く単純な剣へのあこがれのようなものからで  
ある。結果はやはりみんなに迷惑をかけたが、全くこういった自分の身  
勝手さのためであるとするには、疑問が残るだろう。体の不調からやむお  
<sup>かたは</sup> <sup>い</sup> <sup>え</sup>  
合宿中、自分の動けた範囲が限られたものになってしまったのは残念で  
ある。岩場のゲレンデ化(特にハッ峰六峰の冬faceに因して)ということが少  
しとりあげられていたことと思うが、合宿の本来の目的からすれば、やはり  
そう言えるだろう。しかし心情的には、結構満足している。そうちよく来る  
森会があるところでもないし、それに期待していたほど剣というところは  
味知なものではなかったと思える。上級生が少なく、一年生だけの  
partyもずいぶん出たが、これはやむおえないこととはいえ、結構お  
い結果をも残したのではないかと思う。妥協的になろうとする心を押さ  
えさえすれば、よい意味でしごかれる。また危険でない限りのUのU  
やれるというのは精神衛生にもいいことだ。

夏山縦走とあわせて、一年生の技術的な問題、特に歩き方  
などほんの基礎的なことでまた改められる事が多いと思う。かき場  
石ころの河原など歩くとよくわかる。たんだん直っていくものでは  
あろうが、心がけてほしい。又、負荷の軽い事に慣れてはって  
は冬山が心配である。今後大いにトレーニングに励んで  
もらいたい。

## 福田 渉

今山行は、2年生のあり方、及びリーダーのそれをいやがうえにも問いつめられた山行で、結局、どおだったのかと言えは、メンバーは、皆「楽しい、良い山行でした。」と言ひ。そんな言葉を聞けば、喜こんじまうだけれども、今考えると、色々、問題はあつて、それらの問題(特に個人的)を感じせしめたが、故に、有益な山行でした。

## 森 しげる

今年の夏は、上級生不足という部の現状を知りつつも、縦走不参加という申し訳ないことをした。他人山行形式で、縦走があくまでも、強制的なものではないことは、当然だが、山岳部という組織のことを考えれば、各々が、俺の来バクもなく、自由に活動できるものでないことも争えない。組織のことを考えると、山岳部に所属しているのは、そこから得る何かが、あるからであり、そのために部を存続させる必要があるに他ならない。要するにそれは、自分のことを考えていることになる。私の縦走不参加は、上のことを考え合わせても、他にしたい事が、あつたためであるが、何ほともあれ、部の人達には、非常に迷惑をかけたと思つてゐる。

剣の合宿の方は、パーティリーダーをやつたことが私にとって最も意味があつたことだと思ふ。縦走に参加しなかつたので本格的にリーダーシップをとつたのは、初めてのことだつた。リーダーといつても、メンバーより、技術的に長じている訳でもなく、剣をそれ程知つてゐる訳でもなく、従つて自信もなく、リーダー権をもてあつた状態であつた。少くとも厳格なリーダーではなかつた。私をそうさせた「つ」の原因が、自信のないことだと思ふが、考えてみて、自信がなければ、自ずと厳格にならざるを得ないのではないか、

それが本来では、ないかという気がする。

しかし、剣は、いい所だし、行動にも無理がなく、全体として楽しく合宿を終えた。剣の岩は、穂高に比べて、スッキリしていて、快適だと歩いてみた範囲では、思う。これも、剣が、ゲレンデ的であるというような意見が、でてくる一つの原因を作っていると思う。

